

Jerrold E. Hogle,
The Cambridge Companion to the Modern Gothic

Cambridge: Cambridge University Press, 2014.

混沌と迷走の宣伝媒体

河内 恵子

編集者、ホーグル (Jerrold E. Hogle) 自身は、*The Cambridge Companion to the Modern Gothic* (2014) (これ以降は *Modern Gothic* と表記) は、やはりホーグルが編集した *The Cambridge Companion to Gothic Fiction* (2002) (これ以降は *Gothic Fiction* と表記) の「続き」あるいは「コンパニオン」としての役割をもっているが、はたしてどうであろう？

Gothic Fiction では1764年に発表されたホレス・ウォルポール (Horace Walpole) の『オトラントの城』(*The Castle of Otranto*) を基点にゴシックフィクションが250年あまりにわたってその世界をテレビ、映画、ゲームといったさまざまな領域に広げていった過程が14本の論考によって紹介されていた。イギリス文学史に添うかたちでその歴史が示され、年表はウォルポールがリチャード・ベントレイ (Richard Bentley) とともに自らの屋敷であるストロベリー・ヒルを建築における「ゴシックリバイバル」の一部として新たに設計しはじめた1750年からニコール・キッドマン (Nicole Kidman) が主演した映画『アザーズ』(*The Others*) が上映された2001年までを表示し、さまざまなジャンルに広がるゴシックファクトをイギリスとアメリカを中心に具体的に紹介している。年表では表示されていないが、テキスト内ではスコットランド、アイルランド、ドイツ、カリブ諸島といった地域でのゴシックフィクションの発生と発展が手際よく展開されていた。小説というジャンルの発生と発達は18世紀に大きな権力を持つようになった中産階級の成長と絡み合っており、ゴシックフィクションはこの関係性に新しい表現世界を穿

つかのように登場してきた。

Modern Gothic の年表は、「重要なゴシックイベント」と題され、ウォルポールが『オトランドの城』を出版し、上演されることはなかったが、演劇作品 *The Mysterious Mother* を執筆した、1764-1768 を最初に紹介している。最後は2014年で、ここでは、リチャード・ベイツ・ジュニア (Richard Bates, Jr.) 監督の *Suburban Gothic* の上映と2012年に始まったUK Gothic Festivalの最新イベントとしてThe Blogging Goth サイト上に“Whitby Gothic Weekend”の開催が告示された、ということが報告されている。*Gothic Fiction* の年表と同様にイギリスとアメリカでの事項を中心に扱ってはいるものの、イベントがさまざまに影響し合って、新しいゴシックワールドを形成していく過程が具体的に示されていて面白い。

年表が示すとおり *Modern Gothic* には *Gothic Fiction* よりも「21世紀の今」に力点をおいた14本の論考が収められており、これらの論は、*Gothic Fiction* では殆ど言及されることのなかった「モダン」「modern」を共通概念としている。

第一章でホーゲルがまとめている。「ゴシックフィクションは多くの矛盾を内包するジャンルであり、本質的に不安定である。それゆえに、矛盾を基礎としているモダンの時代と密接な関係がある」「ゴシックのさまざまなかたちは数々の異なった要素で形成されているモダンな時代にとって不可欠な存在となっている」「ゴシックこそはモダンに固有なものだ」このようにゴシックとモダンの強い結びつきが繰り返し述べられ、その先駆的具体例として1818年にメアリー・シェリー (Mary Shelley) が発表した『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*) が挙げられている。中世時代の錬金術と19世紀の科学、死者の肉体と生命、親と子供、追うものと追われるものといった対立概念が「縫い込まれた living dead」は——この“living dead” という表現こそが対立概念の共存を端的に示しているのだが——多くの価値観によって造られている modern な社会を迷走する。フランケンシュタイン博士は数々のパーツを利用して「生きもの」(creature) の肉体を創った。それゆえに、「生きもの」のこの肉体こそが生きる矛盾なのだ。矛盾という肉体がモダンという矛盾の時代を疾走する。

“Modernist Gothic” と題された次章で、ジョン・ポール・リケルム (John Paul Riquelme) は『フランケンシュタイン』以降、対立する価値観を共存させる作品が次々と発表され、それらの多くは自然を支配したいという欲望と密接に関係した社会のヒエラルキーに疑問をなげかけているという。そしてゴシックモダニズム (Gothic modernism) というジャンルが明確なかたちで成立するのは19世紀末に活躍したオスカー・ワイルド (Oscar Wilde) からだと指摘する。ワイルドの作品のな

かでは対立する価値観が共存しているのだ。そして、『ドリアン・グレイの肖像』(*The Picture of Dorian Gray*)と『サロメ』(*Salomé*)においてはゴシック性と唯美主義が創る世界に自己破壊と復讐というテーマが濃密に立ちあらわれる。この重層的な結合こそがゴシックモダニズムの本質であり、この世界はエリオット(T. S. Eliot)とイエイツ(W. B. Yeats)に受け継がれていくというのが、リケルムの主張である。いわゆる世紀末文学にモダニズムの展開を求める論考は決して新しいわけではないが、ワイルド、エリオット、イエイツの世界に流れる「暗い文学」がゴシック性に満ち、モダニズム文学の特徴である混沌の連鎖を示しているという指摘はおもしろい。最初のふたつの章でこのテキストの方向性が具体的に示されている。限られたスペースで他のすべての章を紹介するのは不可能だが、*Gothic Fiction*ではほとんど触れられていなかった領域をみてみよう。

グレンス・バイロン(Glennis Byron)とシャロン・ディーンズ(Sharon Deans)が執筆している“Teen Gothic”は若者たち(teenagers and adolescents)が作品の脇役として登場する大人のために書かれたゴシックフィクションではなく、若者を中心に据えた作品について論じている。デイヴィッド・パンター(David Punter)が指摘するように青年期は不安と変化と成長の時期であり、さまざまなもの(者/物)のあいだに存在する境界線の反転がみられる。そしてこれこそはゴシックフィクションにとって不可欠な要素なのだ。ウォルポールもアン・ラドクリフ(Ann Radcliffe)もブラム・ストーカー(Bram Stoker)もスティーヴン・キング(Stephen King)もその作品のなかに若者たちを描き、彼/彼女らの曖昧さとゴシック性を結びつけていた。しかし、G. バイロンと S. ディーンズは20世紀の後半から多く発表されるようになったティーンエイジャーのために書かれたティーンエイジャーを中心に据えた作品に焦点をあてている。

若者たちの意識/無意識を常に支配する性をテーマとした作品がまず紹介される。アネット・カーティス・クラウス(Annette Curtis Klause)の『銀のキス』(*The Silver Kiss*) (1990)では300歳の「青年」吸血鬼サイモンとティーンエイジャーのゾーイとの出会いと別れが官能的に描かれる。この作品の主人公も含めて、バンパイアフィクションの若い主人公たちは、圧倒的に女子が多いのだが、彼女たちは美しい異性のバンパイアと出会うことによって内なる欲望に気付き、最終的には生命力(?)に溢れる存在へと成長していく。バンパイアと同じように、生と死の狭間に存在するのが、狼人間だが、ラフェヴェール(R. L. LaFever)の*Werewolf Rising* (2006)のように、男子読者を対象に書かれた作品では、ティーンエイジャーの主人公が自らの内にある「獣性」を意識し、狼男に変身する経験を

媒介にして「群れの一員(一頭)」として生きるための掟を学ぶといったような、性の官能とは無関係な物語が多い。女子の読者を対象として書かれた作品には、マギー・スティーフヴェイター (Maggie Stiefvater) の *Shiver* (2009) が例として挙げられているのだが、ここでは狼男に恋するティーンエイジャーのロマンスが思春期の女子の性への関心とともに描かれている。これらの作品例から明らかなように現代のティーンゴシックは対象を確実に設定して創作されている場合が多い。

ティーンゴシックが扱うもうひとつ重要なテーマが死だ。このジャンルでは、死の不可避性や永遠性が、すなわち、死の最終性が若者たちによって否定される。大人でもなければ子供でもない曖昧な存在の若者たちは、“living dead”という曖昧な状態を生きる(?)バンパイアに強く惹かれる。生死を超越した美しい強者がもつ静けさ。不死という限りなく曖昧な状態。常識や社会的規範が通用しないこの時空を若者たちは志向するのだ。いくつかの作品が具体的に挙げられているが、2005年から2008年にかけて発表されたステファニー・メイヤー (Stephnie Meyer) の *Twilight* シリーズが、もっともわかりやすい。主人公のベラ・スワンは生-死-誕生を繰り返す「美の神」であるかのようなバンパイア、エドワード・カレンに恋し、自らも不死の存在になることを強く望む。不死の存在になるためには、きわめて鋭い痛みをともなう死を経験しなければならないのだが、ベラはエドワードの助けを借りて、この試練を乗り越える。この作品は、バンパイアと人間、生と死と不死という命の変化、大人と若者との軋轢といったさまざまな境界線を描出しながら、それらの境界線を曖昧化することによって成長する、否、成長することを拒む、若者たちを活写することに成功している。

この章の最後の部分では、若者たちの力と自主性をテーマとして描く作品が紹介される。パトリック・ネス (Patrick Ness) の『混沌の叫び』*Chaos Walking* (2008-2010) やマイケル・グラント (Michael Grant) の *Gone* (2009-2013) そしてスザンヌ・コリンズ (Suzanne Collins) の『ハンガーゲーム』*Hunger Games* (2008-2010) といった作品では親という絶対的な保護者から切り離された若者たちの生きるための旅が描かれている。同じ時期に発表されたこれらの作品は性や死(あるいは不死)といったテーマではなく大人の世界と戦うことを強いられた若者たちの、ときには、凄まじく孤独な道程が語られている。

例えば、『ハンガーゲーム』では大人という権力者が創った世界でサバイバルゲームに参加することを強いられながらも、知能と体力と戦う技と若者同士の仲間意識によって生き残る強く、逞しい女子が描かれている。主人公のカトニスには、美しいバンパイアに恋し、不死の状態に憧れるような部分はまったくない。仕掛

けられたパワーゲームに勝つことを決意したその躍動する姿には、新しい、と同時に、きわめて古典的なビルドゥングスロマンという背景で活躍する若者たちの姿が重なる。これが新しいティーンゴシックの「現在」だろう。

“Multi-cultural and Global Gothic”のカテゴリーのなかでは、“Asian Gothic”の章を楽しみにしていたのだが、冒頭部分で「言語、文化、人種、民族ばかりか、宗教、思想、政治についての見解においても多様性に富む」アジアに直面すると、「この地域のゴシックについての探求は失敗に終わることが運命づけられているようだ」と述べられると読者はたじろいでしまう。ヨーロッパと違ってルネサンスやロマンティズムといった大きなスケールの動きを経験したことがないアジアでは、多くの国が孤立主義を選択したがゆえに、アジアという地域的カテゴリーのもとでゴシックを包括的に語るのが難しいという立場が表明される。そして結果的には混沌としたアジアゴシックのありかたが示されるのだ。

日本と中国とインドの文学を中心に語るという目的が披瀝される。この三か国のゴシックワールドを紹介するだけでも大変な仕事なのだが、合間にシンガポールや台湾の作品への言及があったり、文学作品ではなく、映像作品が紹介されたりするので、読者は混沌とした状態に置き去りにされてしまう。アジアの作品に頻繁に登場する女の霊や赤ちゃんの霊について書かれた部分や戦争と狂気をアジアの風土と結びつけて論じた箇所などは興味深い。しかし、国とか時代、あるいは、作品が取り扱うゴシック的存在の種類等、によって書き分けないと、アジアの複雑なゴシック地図はその迷路を増加させるばかりだ。

Modern Gothic を *Gothic Fiction* と比較するかたちで読了した今、後者がすぐれたゴシック入門書であることを確認した。そして、*Modern Gothic* もまた興味深い部分を多く内包するテキストであることがわかった。しかし、このテキストを何と称すればよいのだろうか？ 入門書というにはいわゆる一般論に通じる紹介の部分は欠如しているし、予備知識なしに理解するには困難な箇所も多い。ホーグルが言っていたように *Gothic Fiction* の「続き」や「コンパニオン」としての側面もあるが、21世紀のゴシックフィクションの豊かさと複雑さを明瞭に示していることを勘案すると、「現代(modern)」が抱えるさまざまな問題を表現する可能性をもつゴシックフィクションの宣伝媒体ととらえることができるのではないだろうか。混沌と迷走の時代を混沌と迷走という手段によって語るゴシックフィクションの未来を安易に予想することを禁じる、しごく興味深い宣伝媒体だと、とらえることができるのではないだろうか。

「あらゆる時代は、その時代が必要とするバンパイアを受け入れる」と語ったの

はニーナ・アウエルバッハ (Nina Auerbach) だが、現代は如何なるバンパイアを受け入れていくのだろうか？ 21世紀のゴシックワールドは始まったばかりだ。

参考文献

Auerbach, Nina. *Our Vampires, Ourselves*. Chicago: Chicago UP, 1995.

Botting, Fred. *Gothic Romanced: Consumption, Gender and Technology in Contemporary Fictions*. London: Routledge, 2008.

Punter, David. *Gothic Pathologies: The Text, the Body and the Law*. London: Macmillan, 1998.

Punter, David, ed. *A New Companion to the Gothic*. Oxford: Blackwell, 2012.

Smith, Andrew, and Jeff Wallace, eds. *Gothic Modernisms*. New York: Palgrave, 2001.